

令和5年度「事後活動に関するアンケート」調査結果

公益社団法人北方領土復帰期成同盟
北方四島交流北海道推進委員会

1. 調査目的

四島訪問事業終了後の事後活動（啓発活動への参加・情報の発信）の把握と今後における促進等を目的に、アンケートを実施しました。

2. 調査対象

H29～R元年度の訪問事業参加者（同行者（報道、医師、事務局）、語り部、団体職員などを除く）。

3. 調査手法

郵送又はメールによる送付

4. 実施期間

令和5年11月～12月

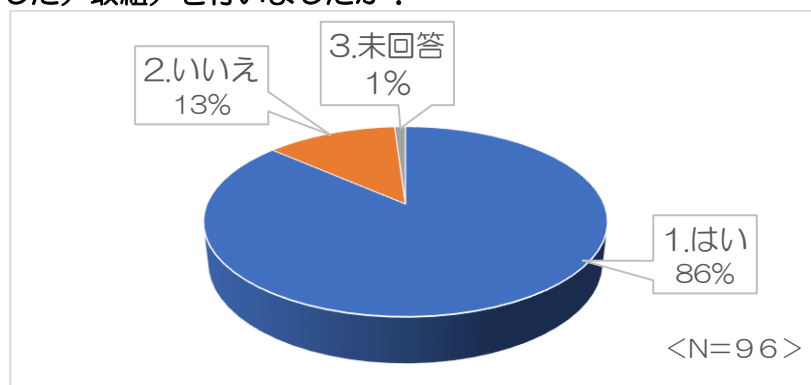
5 発送数及び回収数

	発送数 a	返戻数 b	調査実施 数(a-b) c	有効回収 数 d	有効回収 率 (d/c)
全体	391	87	304	96	31.6%
(うち郵送数)	(325)	(76)	(249)	(88)	(35.3%)
(うちメール数)	(66)	(11)	(55)	(8)	(14.5%)

調査結果

I 事後活動（取組）について

Q1. あなたは、訪問事業に参加した後、現在までに事後活動（北方領土をテーマにした（関連した）取組）を行いましたか？

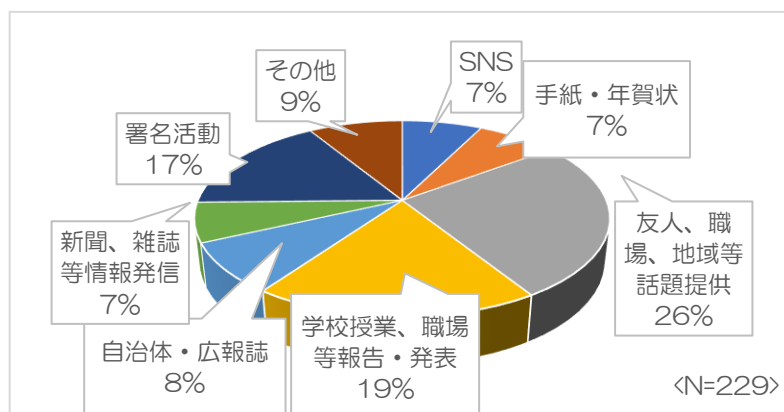


8割以上が何らかの取組を行っている。

II. 事後活動（取組）の内容などについて

（Q1で「何らかの活動（取組）を行った」と回答した人）

Q2. あなたが行った事後活動（北方領土をテーマにした（関連した）取組）をお答えください。（いくつでも可）



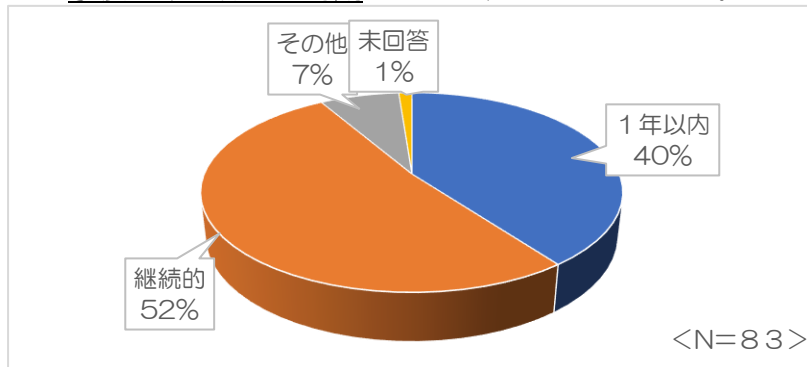
最も多いのは、「友人職場、地域等への話題提供」26%、次いで、「学校授業、職場等での報告・発表」19%、「署名活動への参加」17%などとなっている。

<Q2で「その他」として回答のあった活動例>

SNS 関係	<ul style="list-style-type: none"> Facebook や LINE の登録画面にエトピリカの出航写真を使用している。
学校関係	<ul style="list-style-type: none"> 授業で伝えた。 参加して考えたことを全校生徒に放送を通じて伝えた。 町内の中学校での「出前講座」において、現状を伝えた。 町教育委員会で、町内中学校との連携を進め、北方領土に関する作文コンクールに多くの生徒が参加するように発信している。
職場、地域など	<ul style="list-style-type: none"> アルバムを作り職場で回覧した。 報告書にまとめ、地域の集まり等で配布し、意見を聞いた。 出身母体に対する報告書を提出した。
新聞などを通じた情報発信	<ul style="list-style-type: none"> 新聞等で記事として取り上げて頂いた。 冊子を発行した。

返還要求運動など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 語り部活動を行っている。 ・ 札幌市内での街頭啓発活動を行った。 ・ 署名コーナーを伴った北方領土写真展を行った。 ・ 北方領土問題に関する講演を行った。 ・ 弁論大会への発表、参加をした。
----------	---

Q3. Q2の事後活動を行った時期について、お答えください。

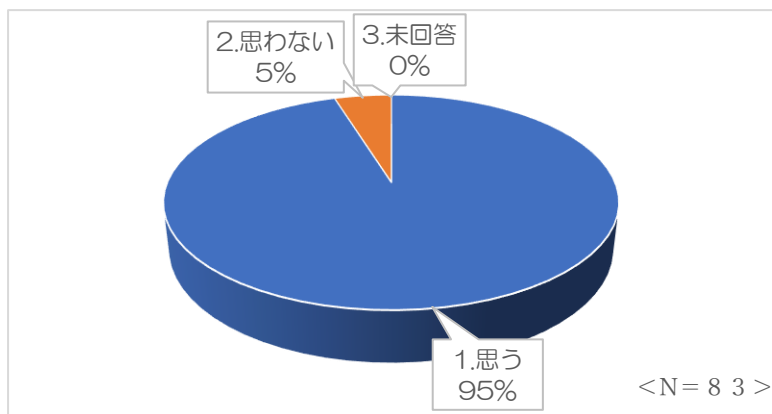


約半数が「継続的に
行っている」一方、
「訪問後概ね1年
以内」が40%とな
っている。

<Q3で「その他」として回答のあった内容例>

- ・ 数年にわたって授業などを行った。
- ・ 知人、近隣（近所）の人に話す。

Q4. あなたは北方領土をテーマにした（関連した）取組を今後も継続したいと思いますか？

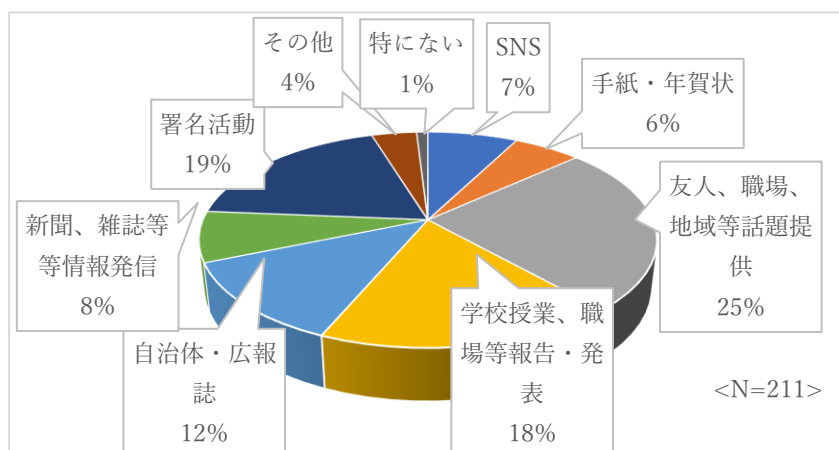


「取組を今後も継続し
たいと思う」が9割を
超えている。

<Q4で「取組を今後も継続したくない」として回答のあった内容例>

- ・ 膝の痛み等、健康問題があるため。
- ・ 社会人になり北方領土問題について取組をする環境がないため。

Q5. 今後、あなたが、取り組んでみたいと思うものを以下のなかから選び、理由があればご記入ください。(いくつでも可)



今後、取り組んでみたいものとして、最も多いのは、「友人、職場、地域等への話題提供」25%、次いで、「署名活動への参加」19%、などとなっている。Q2の「行った取組」の割合と概ね同様となっている。

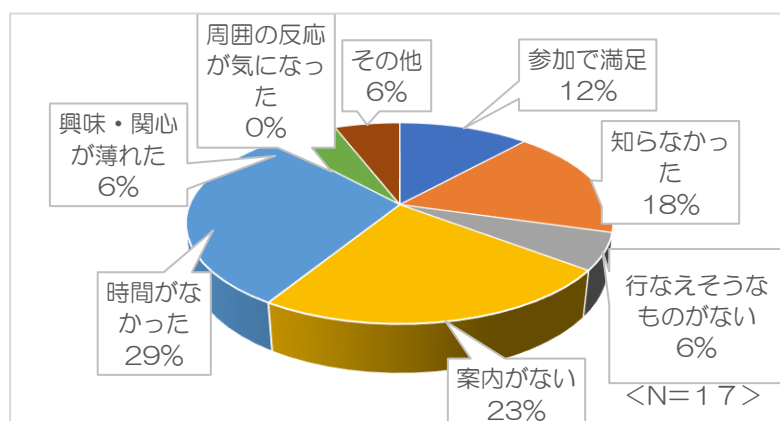
<Q5で「その他」の回答のあった内容例>

- ・ 北方領土問題に関する講演会、署名コーナーを灯った北方領土写真展
- ・ 訪問事業に同行した方々との交流会の継続。
- ・ 語り部活動。

Ⅲ. 事後活動（取組）を行っていない理由などについて

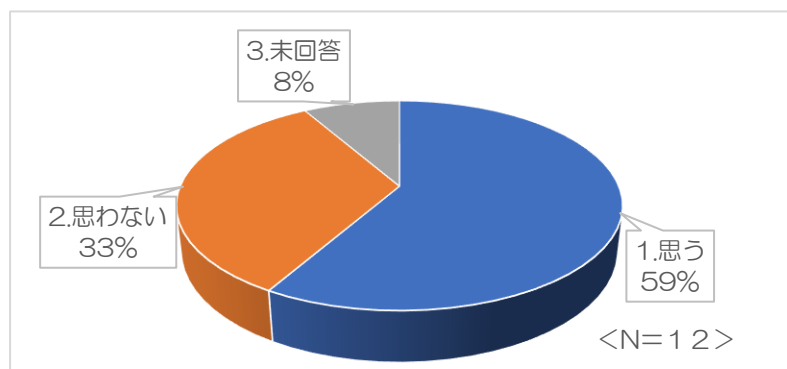
(Q1で「取組は行っていない」と回答された方のお答え)

Q6. 訪問事業に参加した後、事後活動（北方領土をテーマにした（関連した）取組）を行っていないのは、どのような理由からですか？(いくつでも可)



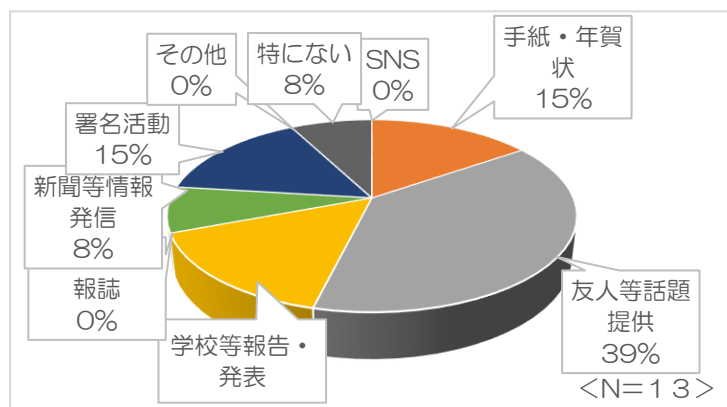
取組を行っていない理由として、最も多いのは、「時間がなかった」29%、次いで、「案内がない」23%などとなっている。

Q7. あなたは北方領土をテーマにした（関連した）取組を、今後、行いたいと思いますか？



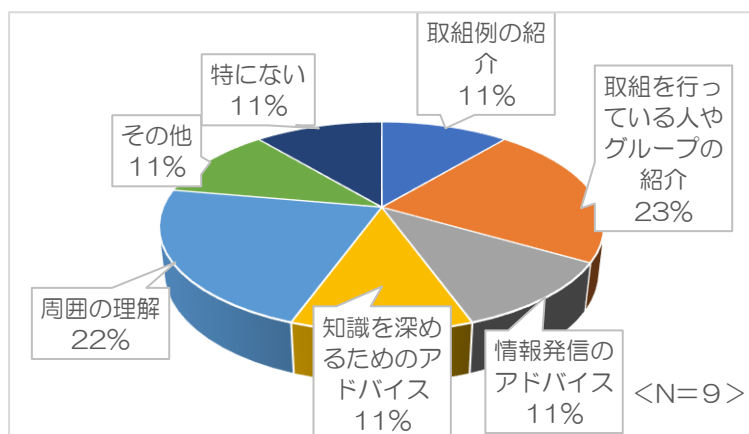
「取組は行っていない方」においても、約6割が、「今後、取組を行いたい」との回答となっている。

Q8. 今後、あなたが、取り組んでみたいと思うものを以下のなかから選び、理由があればご記入ください。（いくつでも可）



「取組は行っていない方」において、今後取り組んでみたいと思うのは、「友人・知人等への話題提供」が39%と最も多く、次いで、「手紙・年賀状などへの記載」「学校・職場等での報告・発表」「署名活動への参加」がそれぞれ15%となっている。

Q9. 訪問事業に参加した後、このようなサポートがあれば事後活動（取組）を行ったかもしれないというものがあればお答えください。（いくつでも可）



ほぼ、まんべんなく分散している。

IV. 北方四島交流事業や今後必要な取組に関するご意見など

交流事業の再開に関するもの
<ul style="list-style-type: none"> ・感染症やロシア国内の情勢等、難しい状況があらうかと存じますが、交流事業はこれまで同様に継続していただきたい。 等
情報発信に関するもの
<ul style="list-style-type: none"> ・様々な形でもっと発信していけるとよいと思います。 ・YouTube にアップしたビザなし交流に関連する動画は合わせて6万再生以上見られています。 等
若い世代への啓発などに関するもの
<ul style="list-style-type: none"> ・若い方が多く集まるイベントとタイアップした事業の実施が必要と考えます。 ・世論喚起のためには、社会教育が中心となった運動をすすめた方が良いのではないかと。 等
学校教育に関するもの
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の問題ではなく国として取り組む問題なので、全国の小中学校に歴史教育として、正しい教育をして欲しい。 ・今後も北方四島の歴史・元島民のことを大切にした領土教育を進めていきたいと思う。 ・以前は小学校の授業（国際交流の一環）で話しました。機会があれば協力したい。 等
今後の取組に関するもの
<ul style="list-style-type: none"> ・写真展は見て感じられる取組だと思うので継続したほうが良い。交流中の場面だけでなく、船舶の様子や島の景色など、流れを具体的にすると、この事業がより身近に感じると思う。 ・継続するしかありません。実際にその地を踏んだ者が体験談などを周りに伝えることが大切です。 ・元島民関係者や根室市内住民だけでなく、交流訪問事業に参加された方々（特に他地方にお住まいの）と継続的に連絡し協力を求めることにより、北方領土問題への理解が広まるものと思慮する。 ・北方領土へのビザなし訪問者の活動報告の場をもっと提供するといいたいと思う。 ・交流にて関わることでできた友人たちに会える場が欲しい。 等
訪問事業に関するもの
<ul style="list-style-type: none"> ・訪問事業には元島民や2世・3世など以外の方も、もう少し参加者に加えてもよいように感じます。私は2世3世ではありませんが、参加することができとてもよい勉強になりました。 ・お互いの文化や考え方の違いが理解しあえるような深くかわりを持つ事業を共催できると良い。 ・参加者が行政・団体・政治家など特定枠のような方ばかりで、いまひとつ関心が薄い人のように思った。本当に関心の強い人を集めて交流すべきかと思う。 等
返還要求運動・署名活動に関するもの
<ul style="list-style-type: none"> ・北方領土は返還されないと諦めてしまえば、それぞれロシアの思う壺。決して諦めることなく、交流事業や署名活動について継続していくことが何より重要である。 ・運動が根室方面に片寄っている。世論を盛り上げるには、札幌や東京への啓発が大事ではないか。 ・支部等でも最近町内会に積極的に署名運動をお願いしている。 ・署名簿を事務局に届けたが、それがどう活用されたか、政府に送付しただけでは納得がいかない。 ・墓参と言っても、最近では「墓じまいをする」とか、「お墓はいらない」とかという方もいて、だんだん訴えにくくなります。 等

その他

- 現在のような困難な状況にあっても、できることを積み重ねていかなければならないと思う。高齢化が進む元島民の方々の気持ちを思うと何とか早急に解決できないものか断腸の思いです。
- 元島民が不在となる日も遠い未来ではなく、記録が（映像も含めて）必要と思う。
- 北方領土に元島民は自由に行ったり来たり出来るようにすべきである。
- 訪問参加後は、どうにかしなければと思いましたが、やはり国の問題ですので、国が力を入れて解決策を考えて実効して頂きたいと思う。
- 元島民の見舞金や補償金の政府の取扱いをもっとしっかりやって欲しい。
- 各地の地元では一生懸命やっているのに対し、政府機関は予算が無いという理由で何もできない現状。予算がなければ予算を組むべきではないか？
- 北海道を離れてみると、北方四島は既に歴史の話であって、現在の興味関心ではない。
- オンライン交流に関する意見、北方墓参の早期実施を求める意見、訪問の際ホームビジットで訪れた家庭との手紙のやり取りを希望する意見。 等

○アンケートを実施した際に資料や情報提供を頂きました。

アンケートとともに、語り部としての活動の記録や写真、報道機関からの取材を受け掲載された記事のほか、終戦後、ご自身が島を離れた際の様子などをまとめた冊子等、多数の資料を送付いただいた。

アンケートとともに、県庁のホームページに掲載された訪問事業の参加報告書を送付いただいたほか、「訪問中に撮影した写真を県庁の SNS に掲載したところ、多数の反応があった。」との連絡いただいた。

アンケートとともに、「訪問後は、職場や地域研修会等で発表したが、ここ数年は取組ができず、申し訳なく思っていたところ、今回のアンケートを切っ掛けに、また、取組を行っていきたい。」との連絡いただいた。

調査票を郵送したところ、「一緒に訪問した長男が海外で勤務しているため、アンケートに回答するよう連絡したいので、回答先のメールアドレスを教えて欲しい。」との問い合わせがあった。また、ご自身についても、アンケートの回答をいただくとともに、「勤務する高校や、非常勤講師を務める大学で、訪問した際の経験を教材化して、授業・講義を行っている。」との連絡をいただいた。